

湯治場の現在における滞在と居住

—ハイデガーの *Aufenthalte* (アウフェンハルト) が示唆するもの—

明治学院大学大学院
永岡圭介

【目的】

本報告は、湯治場の社会構造を滞在（訪ねる）と居住（住まう）の側面から捉え、場所に根づくということについての現代的な意義を提示するものである。場所に根づくということが、長期的に滞在することや定住することに依らずして、いかにして可能か。この問いは、都市・農村部ともに地域の社会統合を深く考える上での核となるであろう。時間的な継続と空間的な近接性を専らとするような近代的な思考に依らずして、湯治場に見られる「逗留」は、現代の共同態を成す形式であると、報告者はひとまず考えたい。

【背景】

7日一廻りを単位とする長期滞在が一般的であった湯治は、現在に至って短期化しているという。これは、報告者が調査した肘折温泉郷（山形県大蔵村）の湯治の動向からも、また日本温泉協会による報告からも知ることが可能である。この背景として、わが国の場合、戦後の高度成長期の兼業農家の増加や過疎化、余暇と娯楽の大衆化に沿った温泉の観光地化がこれに大きく関わっている。これは湯治場であり温泉地を訪ねる側のマクロな動向であり、プッシュ要因でもある。

しかし、滞在日数の短期化は、現代の湯治の模索と営みにいかに関わっているだろうか。現代の湯治の模索と営み、あるいは湯治場の衰退に対して、温泉の観光地化は必然的ではない。湯治場に内在する要因やプル要因、誘う側の動向も合わせて、現代の湯治場が示す「観光温泉地」とは別様の姿を捉え、*Aufenthalte*=逗留が示唆するものを、報告者は探究する。

分析概念の一つとして、社会学者アーリは、ハイデガーを引き合いに、観光と移動が前景化した現代を指摘していることが挙げられる。ハイデガーが紀行で示した *Aufenthalte* は我々に何を示唆するのだろうか。

【方法】

哲学者ハイデガーが1962年に訪ねたギリシアの紀行文をテキストにして、「滞在を可能にするアレテーア」と「故郷に住まう」ということを中心に、相互の概念的関連づけおよび、これらが示唆するものを考究する。なお、この紀行文のタイトルは、*Aufenthalte* であり、ハイデガー全集では、「滞在」と邦訳されている（三木正之、1983）。

また、肘折温泉郷の湯治を事例に、再来湯治客を会員とする「湯の里ひじおり倶楽部」とそれに付随する湯治場体験という営みに関して、聞き取りを含めた調査から得られた内容をもとに、報告者は課題と展望を考察する。

【結論】

ハイデガーは、ギリシア紀行において、デーロス島のアレテーア経験が「逗留」となったと言う。アレテーア、つまり現前にて明かし（開頭）つつ守り隠す（覆蔵）ことが、故郷に住まう滞在を可能にし、訪れる者に回顧する場所を与える。場所を見出し、故郷として住まうことが、回想することを通じて、「逗留」に関連づけられる。

湯治場での滞在は、その期間の長い短いに依らずして、温泉を中心とした場所に居留することに先ず意味を置いている。「湯の里ひじおり倶楽部」のような、場所に根づいた集まりは、再来と回想をもとに、そうした現代人の「逗留」を下支えする好例である。この点で、現代における湯治場は、単に移動の中継点としての観光温泉地とは別様の姿をあらわし、「居住かつ滞在≒逗留」という生活形式の一つを規定している。